

[第8回日本語文化学会発表要旨]

ディクテーションの誤答分析の試み

—日本語中上級学習者を対象として—

中込 明子

(1994. 6. 4発表)

I. 研究の目的

本研究では独話の聞き取りの調査により、どんなところが聞き取れていないかを調べ、併せて、一定期間における誤聴の変化を見ることで、聞き取りのメカニズムの一端を観察したいと思う。

II. 調査の概要

授業計画の中で、大学の研究留学生20名（G＝非漢字系学習者）、学部1年生25名（C＝中国人学習者）にディクテーションをさせ、聞き取り能力の変化を見た。また、レベル確認のためクローズ・テストを実施した。

最初の「日本の放送」のディクテーションに続き、毎週授業で30～40分のディクテーションの訓練を行った。授業では、大まかな内容理解の確認と、解説も行い、約2か月後、再び「日本の放送」をディクテーションさせた。また最後に、日本語学習歴やディクテーションについてのアンケートを実施した。最終的にデータとして得られたのは、C11名とG19名の合計30名であった。

III. 分析結果

CとG合計30名の各文節毎の誤答数のグラフ（図1）を作成し、次の1. 2. の分析を試みた。また3. は、CとGで別々に誤答の分類表を作って分析した。

1. 誤りの多い（少ない）箇所

ポーズは4文節前後で意味のまとまりの良い所に入れた。ポーズの後の文節は、1・2回とも誤答数が下がる傾向が見られた。また、誤答の前後には誤答が、正答の前後には正答が多く見られた。

2. ディクテーションの1回目と2回目の比較

1回目も2回目もグラフの山と谷の形はほぼ同じで、難しいところは2回目も難しいということが窺える。1・2回の差が大きい箇所はかたまりをなして現れており(図のA~G)ある語が聞き取れるとその周囲の語も聞き取れるようになるということが推測できる。末延等(1982)はこのような動きを“bubbling-up effect”(未知の単語を浮かび上がらせるような動き)と呼んでいる。

3. 中国人学習者(C)と非漢字系学習者(G)の比較

1)助詞 Cは誤答の数も誤りの割合も大きく、助詞の脱落が多かった。

Gの誤答は1箇所のみである。

2)語彙部分 CGとも未知語あるいはfamiliarityの低い語に誤りが多い。

3)文法要素 Cは連体修飾部分の誤りが多く活用語尾の誤りが目立つが、

Gは1箇所のみである。

4)文末 Cは文末に誤りが多い。Gは引用節末尾の誤りが1箇所である。

Ⅲ. 今後の課題

- ・中国人学習者のデータを増やし、上記1) 3) 4)について母語との関連があるかどうかを見る。
- ・今回の分析を上位・下位のグループ別に行って比較する。
- ・1、2回を比較して内容語と機能語のどちらに正聴率が増えているかを調べ、聞き取り能力の向上に関わる要素を探る。それにより聞き取りのメカニズムの一端が観察できるのではないかと思う。

<主な参考文献>

竹蓋幸生(1989)『ヒアリングの指導システム』研究社出版

Hisao KAKEHI, Mineo SUENOBU, Roy YOUNG, Kazuo KANZAKI, Shigeru YAMANE

(1981) “An Analysis of Perceptual Error: Learning Process”

大学英語教育学会紀要第12号

Mineo SUENOBU, Roy YOUNG, Kazuo KANZAKI, Shigeru YAMANE(1982)

“An Analysis of Perceptual Error: Effect of Learning and Mechanism of Hearing” 大学英語教育学会紀要第13号

(お茶の水女子大学日本語文化専攻修士2年)

「日本の放送」 C+G

